

トケイの黄昏日記より

第5話 日本のマチュピチュ

検査会社から検体を回収にくる担当者の一人にY君がいた。新入社員だが、すでに前髪が後退しはじめているから30歳を超えているだろう。再就職に違いない。慣れない敬語を使うよう指示されているのだろうが、全体の所作が営業マンとしてはぎこちない。でも、誠実で一所懸命仕事に取り組んでいる姿にボクは好感をもっていた。

ある日、そんな彼が何かモソモソ話を切り出しにくそうにしているので「どうしたんや？」と問いかけた。「あの一、私の実家は出石にございまして・・・、これはその・・・お土産でございます」とおもむろに包装紙に包まれた蕎麦を取り出した。その味のことは忘れたが、イズシという珍しい読み方の土地とそこの名産が蕎麦であることはY君のことと一緒に記憶のすみに残っていた。もう30年以上も前の話である。

ところが先日、出石方面にでかける所用ができた。JR 和田山駅の周辺は小高い山に囲まれた盆地で、小さな川沿いに集落が拓けている。そこから国道沿いに20分ほど歩いて、人家が途切れたところに予約していたビジネスホテルがあった。ホテルといっても、喫茶室や食堂は古びたまま閉鎖されていて素泊まりということになる。

翌朝、初秋の山里にあるホテルの窓から眺める景色は深い霧に包まれていた。近くにあるはずの人工的な夾雑物は視界から消えている。少し晴れてきて遠くの山並みが姿を現すと、そこは水墨画の世界だ。余白となった空白に自分の心を描いて楽しむことができる。

ひょっとして、この山深い霧でもやった風土が大和民族の気質や文化の形成に影響してきたのではないか。それは想像力をかきたてて豊かな精神世界を育む土壌となってきた。しかし、一方で臭いものには蓋、不都合なことは隠蔽という習癖も生じている。ふと、そんな思いがよぎってきた。

ホテルの受付に「日本のマチュピチュ」とコピーされた竹田城跡の写真があった。山頂のわずかな平地に遺された城壁跡の石垣は整然と区画されていて、写真で見る本場ペルーのマチュピチュと似ていなくもない。否、むしろ周囲を深い雲海に囲まれて浮かび上る竹田城跡の方が天空の城という雰囲気がある。（本場のマチュピチュは標高2430m、竹田城跡は353m）

午後はすっかり晴れ上がって絶好のピクニック日和になった。私が本場ペルーまで出かけるのはまずあり得ないから、日本のマチュピチュを訪問することにした。ホテルからタクシーで山の中腹にある駐車場まで20分ほど、そこから山頂までは徒歩で30分ほど登らなければならない。山裾に着くと、なんと山頂へ向かう道路にはマイカーが延々と停滞しているではないか。駐車場の空く順番を待っているのだ。何でも1年ほど前にこの城跡がテレビで紹介され、映画のロケもあって一躍観光ブームになったらしい。そんなこととはつゆ知らずタクシーを利用したのは正解だった。停滞する車を横目にスイスイと駐車場まで運んでくれた。

「それにしてもこの雲海に浮かぶ城跡の写真はどこから撮ったのですか？」運転手にそんな質問をした。「この山を降りて車で15分程の所にポイントがある」とのこと、案内してもらうことにした。そこはくねくね曲がる狭い山道を上り詰めた峠の頂である。土地の人にしか分からないだろう。プロの写真家はそこにテントを張って夜明けのシャッターチャンスを待つのだそうだ。

思いもかけず観光客が押し寄せるようになった土地の人はこの機を逃すはずはない。名産である蕎麦の売り出しにも力を入れ始めた。単に土産用に売るだけでなく、蕎麦打ち体験なども企画した。これもテレビで見た「蕎麦打ち名人」の話を思い出しながら・・・、蕎麦打ちというのは奥が深くて、一人前の味を出すには大変な修業が必要らしい。ものは試しだ、挑戦してみることにした。

もとより、不器用なボクの出来は惨憺たるものだった。こねる・伸ばす・裁断する、どれをとっても自分でも情けなくなるほどの不恰好なでき栄えである。次はそれを別室で試食するのである。とても耐えられないだろう、と覚悟はしていた。

やがて店員さんがボクのこね回した大小厚薄・不揃いな蕎麦を皿に盛ってきてくれた。

勇気をだして一口ほお張って見る、・・・ところがこれが「旨い」のである。その店が用意したつゆが旨いにはちがいない。でも、ボクが打った蕎麦の食感も結構いけるのだ。その見かけの悪さにもかかわらず・・・。 テレビの蕎麦打ち名人には申しわけないが・・・。

レジで支払いをしているところへ、店の奥から白い作務衣に紺の前掛けをした蕎麦打ち姿の男が近づいてきた。視線はボクの方に注がれている。その容貌に見覚えがある。

「ひょっとして Y 君?」「アッ、ハッハイ、ずいぶんお久しぶりで、ご、ございます」

30 年前にサラリーマン生活に見切りをつけて実家に帰り、今では名産の蕎麦打ちをしている、とのこと。

・・・と、まあこんなオチでしめることができたならこの閑文字にも少しは味がでると思うが、現実はそのようではない。当然、この最後のところは水墨画の空白を埋めるフィクションである。ただし、ここで蕎麦を食いながら、前髪がすっかり後退した店主を見ながら・・・、ふと Y 君のことを思い出したのは本当の話だ。

2013・10



次ページ 「第 6 話 気になるポーズ」

次々ページ 「第 7 話 ウロポロス」

もどうぞ

トケイの黄昏日記より

第6話 気になるポーズ

今年は2020年の東京オリンピック開催が決まって関係者筋は大はしゃぎである。とくに暗いニュースがつづくなかで未来に目標をもって人々が活気づくのは悪いことではない、と思っていたら「開催ハンターイ」という人もいるのである。ご隠居のわが身にはどうでもいいようなものだが・・・。

スポーツを賞賛する人のうちには、する人とみる人がいる。私は当然みる方である。かつてはトラ狂を自認していたころもあったが、加齢に伴ってもうそんなエネルギーはない。でも、かろうじてアンチジャイアンツの炎だけは残っている。カーブがんばれ、ヤクルト負けるな、どこでもいいからジャイアンツをやっつけてくれ！

(脳ミソは老化すると賞賛細胞より憎悪細胞の方が強くなるのかな・・・？ 困ったものだ。こんな老人は嫌われる。)

「スポーツは擬似戦争である」と誰かがいっていた。なるほど野球やサッカーなど団体競技では私も日本チームを応援している。一方、ボクシングやゴルフなど個人競技ではとくに日本人選手にこだわってはいない。では、私がスポーツを見る楽しみは何だろう？ 以下、愚見である。

一つは相手と戦うスポーツには手練手管を弄しての騙しあいがある。ルールに反しない限り、否、審判が無視するか見逃しさえすればOKなのだ。建前はフェアプレーなどといっているが、宣誓式の舌の根も乾かぬうちから心理的駆け引きやウラのかきあいが始まる。これを戦略や作戦を練る、と言い換える。野村監督は頭を使ったデーター野球という。成功したら頭脳的プレーと賞賛されるが、やられた方は同情よりもむしろバカにされる。他人の喧嘩や騙しあいを安全なところでみるのは面白い。

二つ目はその意外性にある。日常生活でも一寸先は闇だけれども、スポーツでも競技中のアクシデントが予期せぬ結果になる。トラック競技で先頭集団がゴール前でバタバタ転倒したり、優勝候補がフライングで失格したりする。不運な敗者には気の毒だけれども、タナボタの勝者にとって他人の不幸がわが身の幸せ、蜜の味である。

こんなことを言っていると、純情なスポーツファンから顰蹙を買うかもしれないが、そうではない。スポーツには人間がもっているイヤな本性を昇華させる力がある、と讃えているのだ。

余談だが、以前大相撲の八百長が発覚して大きな社会問題になった。相撲界というのは並外れた体格をもつ異能の人々の集団である。私は角界の内実に通じているわけではないが、外から見てもそれは同業者の集団であり、身過ぎ世過ぎの世界であることぐらいわかる。

日本の伝統を伝えるのが大相撲というなら、むしろそれは芸能に近い。しかし、大相撲は文楽や歌舞伎のように筋書も結末も分かっているながら楽しめる、というものではない。ファンは勝負の意外性も期待しているのだ。しかし、大相撲は意識下にあるうとなかろうと人間がすることである。シャモの闘いとは違う。八百長で実害を受けるのはバクチをしている人ぐらいではないのか。

今、私が身を置く娑婆はイカサマだらけだ。力士たちのからだは並はずれて成長しているが、社会的にはまだ未熟で純真な年頃である。現役を離れてからの人生の方がはるかに長い。世の学識経験者といわれる人々がしたり顔で再起不能な処分をするのはやりすぎだろう。要は程度の問題である。教育的な意味においても、少しは大目にみてやれんものか？

相撲界を擁護したところでマスコに注文がある。場所が終わった力士がソバを20～30杯食べたり、カラオケを披露するのもいいが、彼らが被災地へ行って1日でもいいから雪かきや瓦礫処理のボランティアをしている姿を放映してくれないか。その超人ぶりに国民はあらためて敬意を表し、相撲ファンは増えるだろうに・・・、こんなブランは無理か？

さらに余談だが、私がはじめて力士を身近に見たのは後にも先にも、小学生のころ地方巡業にきた大関千代の山(後の横綱)であった。それまで大きな大人であった周囲の人々がなんと貧弱に見えたことか。以来、横綱吉葉山、鏡里から栃錦、若乃花・・・と続いて今日にいたる長い歴史を新聞・テレビを通してみている。力士たちの栄枯盛衰はまさに人生の縮図である。大輪の花を咲かせる人わずか、咲かずに終わる人ほとんど、逆境に立ち直る人わずか、挫折する人ほとんど・・・。かくして、すべての力士にやがて土俵を去る日が来る。長い短いはあるとしても間違いなくその日はやって来るのである、鳴

呼。

三つ目はスポーツはみる人に深い感動を与えることである。一流選手の鍛え抜かれた身体能力の高さとその躍動する美しさはどうだ。そこには勝敗など度外視した芸術性がある。

とくにオリンピック選手ともなると一流中の一流である。天賦の才能に加えて余人の計り知れない努力や精進があったのだろう。まして運よく表彰台に立つ人には心から祝福と賞賛を惜しまない。ご褒美のメダルをもらって、感涙の頬ずりやそっと口唇に触れてキスする姿もほほえましい。

だが、次ぎの瞬間、あろうことか表彰台の上で歯をむき出してもらったばかりのメダルを齧りだす選手がいるのである。「ナッ！ 何をするのだ？」 その不可解な行為に戸惑っていても、テレビカメラはズームアップを続けている。

私がこのシーンをみたのは 2000 年シドニーオリンピックのマラソンで優勝した高橋尚子が最初だった。以来、ときどき他の選手もやっている。金でも銀でも銅でもやっている。

「あのポーズは何のメッセージだ？」

「外国の選手もやるのだろうか？」

そんな疑問に長年悩んでいた。ところが最近、ある人のコラムでその答が見つかったのである。

つい嬉しくなったので、以下、紹介したい。

2013・12

—— オリンピックの金メダルが本ものなら この大会（アジア大会のこと；筆者注）のメダルはにせ物ではないだろうか。ほんものは金無垢でにせものは金メッキなのだろうか。それなら昔の支那人のまねしてすこしかじってみればどうか。 （にせもののメダル 本物のメダル 山本夏彦）

トケイの黄昏日記より

第7話 ウロボロス

昨年のことだが正月のある日、中学時代の友人S君から電話があった。

「あの・・・君からもらった年賀状やけど・・・自分の尻尾を喰っていったらそのへびはどうなるんや？」

巳年のその年、ボクは年賀状にへびが自分の尻尾をくわえて環状になっている姿、ウロボロスといわれているイラストを添えていた。この意味については諸説あるが、ボクのもう一つの関心は、古代文明の発祥したところ、インド、中国、ギリシャ、アステカ、北欧などに同じようなものが残されているとのことだ。交流のない時代にそれぞれ似たような絵を古代人が遺している。これは共通の遺伝子をもつホモサピエンスはやはり同じようなことを考えていたのだろう。

へびが示す不気味な姿かたちと奇妙な動き、自分より大きな動物を丸呑みするかと思えば、長期間の飢餓にも耐えることができる。古代人達はこんな生き物に特別な思いを寄せていたのだろう。それは地方によって神の使いであったり、悪魔の化身であったりもするのだが・・・そのへびが自分の尻尾をくわえている姿、つまりウロボロスと宇宙の森羅万象を関連づけたイラストが強く印象に残っていたので巳年の年賀状に貼りつけていた。(挿図)

S君「それで尻尾から喰い始めて胴・腹・胸へ進むやろ、それから首へ・・・へびに首はあるんか？」
ボク「まあ鎌首をもたげるといふから首はあるんやろ。としてもそれから先、自分の後頭部に食いつけるのかなぁ・・・？」

以前、奄美大島の名瀬市ハブセンターでニワトリや自分と同じ大きさのへびを丸呑みしているハブの標本を見たことはある。しかし、自分の尻尾を飲み込んでいるへびは見たことがない。自分の尻尾に噛み付こうとして、くるくる廻っているネコやイヌなら見たことがある。もちろん彼らはすぐあきらめてやめてしまうが、へびが自分の尻尾に食いつくのはまんざら不可能なことでもない。もしそうならどうなるのだろう？ 古代人たちは一体何を思ってこんな絵を残したのだろう？

「宇宙の始まりは無の状態から、量子力学的な作用により誕生した」と、ものの本に書いてある。残念ながら量子力学だのヒモ理論だの、あるいは11次元の世界だ、虚数の世界だといわれてもボクにはイメージできない、わからない。

「宇宙に始まりがあるなら、その前もあるはずだが・・・？」とこれは凡夫の素朴な疑問だろう。それに対する答えは「答えようがない」というのが科学的な解答だそう。というのも「現世の我々が認識できる時間や空間は宇宙が誕生してからできたのだ」と宇宙物理学者はいう。ボクにだって「空間が歪む、時間は戻らない」程度なら分からないこともない。しかし、「時間も空間もない世界」は想像できない、納得できない、分からない。こうなれば信じるか、信じることができるか、ボクにとっては宗教の世界のような気もする。

色即是空・空即是色は般若心経だが、宇宙物理学者によれば宇宙の始まりも「有」と「無」が入れ替わり立ち代り出ては消え、消えては出ていたというのだ。そのうち微妙なバランスが崩れて残った物質によって今の宇宙が形成された、という。その宇宙は今猛烈な勢いで広がっている。それが永遠に続くのか、ある時点で収縮に転じるのかは今のところ分らない。なにしろ宇宙の解説書にはダークマターとかダークエネルギーなど、正体不明で妖怪みたいな単語が平気で出てくる。

一方、仏教では世界の成立から破壊に至る四大期があつてこれを四劫と教えている。広辞苑によれば成劫（世界が成立する期間）、住劫（世界が持続する期間）、壊劫（世界の壊滅期で、このときにおこる大火を劫火という）、空劫（次の世界が成立するまでの何もない期間）だそう。

仏教の教えが何を根拠にいつているのか？ おそらく悟りを啓いた人の直感だろう。けれどもこのレベルの話になると、宗教も宇宙物理学も「目クソ鼻クソ」のようなものだ。ついヤケクソ気味に下品なことを言ってしまったが、どちらもボクの脳ミソを超えているという点では似たり寄ったり、という意味だ。誰か助けてくれないか。

頭がボーとしたところで、ふとケプレの逸話を思い出した。

ドイツの有機化学者であった彼は 4 価の炭素分子が 6 個つらなるベンゼン C_6H_6 の化学構造を考えていた。常識的には横に連ねた長鎖構造でいいはずだが、それでは始めと終わりが説明できない。そのうち彼は寝入ってしまった。すると夢の中に多くのへビが出てきてそのうちの一匹が自分の尻尾に噛みついた。目が覚めたところで「ベンゼンはリング状構造をしているのに違いない」、と確信した。

できすぎた話でその真偽はともかくボクにはこの種の話の方がいい、ホッとする。

「ところで、君の古代史研究の方はどんな具合や？」S 君との長電話でボクは話題を変えた。

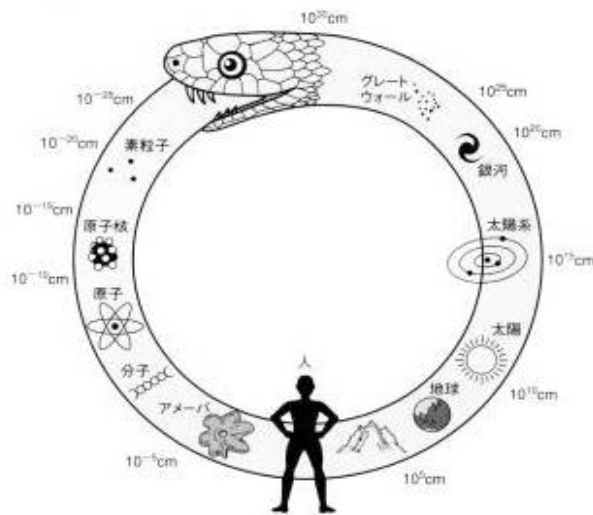
「うん、やはり飛鳥地方がおもしろい。暖かくなったら発掘現場をうろつくつもりや。新しい資料も出てきたからな」

「めしでも食いながら・・・君の話を聞かしてくれや」

「北浜にうなぎ専門店をみつけたから、よかったら案内するわ」

・・・ところで、うなぎも自分の尻尾をくわえるのやろか？

2014, 1



{インターネットより}